

帰りたくないなら、
そう言え——期限付き同居
の建築士は、私の嘘も
本音も身体ごと暴いて離し
てくれませんか

熱い指先が鎖骨をなぞった瞬間、背筋を甘い電流が駆け抜けた。

「……っ」

声を殺したつもりだった。なのに喉の奥で潰れた吐息は、静まり返ったリビングにくっきりと響いてしまう。

「我慢するな。——聞きたいんだ、お前の声」

堂島蓮一の低い声が、耳のすぐ横で震えている。ソファに押し倒された背中にクッションの柔らかさ。見上げた先にある蓮一さんの顔は、いつもの無表情じゃない。黒い瞳の奥に、見たことのない焰が灯っている。

——どうしてこうなったんだっけ。

思考を辿ろうとした矢先、指先が首筋に触れて、全部吹き飛んだ。
。

「ひ、あ……っ」

「ここか。——耳の後ろ、こんなに敏感だったのか」

知らなかった。自分でも触ったことのない場所を、この人の指が正確に見つけ出す。唇が耳朶をかすめて、舌先がそっと縁をなぞった。首筋から肩へ。開いた鎖骨のくぼみに唇が落ちる。ぞくぞくと肌が粟立って、腰の芯がきゅっと疼いた。

「蓮一、さん……やだ、そんな……っ」

「やだ、の顔じゃないだろ」

見透かされている。耳たぶが熱い。感情が昂ると赤くなる耳を、この人はいつから見ていたんだろう。

——三十分前のことだ。

契約最終日の前夜。土曜日。梅雨の末期の重たい雨が窓を叩いている。最後の夕食を作った。蓮一さんの好きなものを全部並べた。鯖の味噌煮。ほうれん草の胡麻和え。豚汁には赤味噌を少し足した。この人が赤味噌寄りの味付けを好むことを知っている。いつから知っていたのか、もう思い出せないくらい自然に。

蓮一さんは全部食べた。最後に豚汁を一口飲んで「……味噌、変えたか」と聞いた。「赤味噌を少し足しました」と答えた。それだけ。いつもの、何でもないやりとり。

食器を洗って、リビングに戻った。蓮一さんは窓際に立って雨を見ていた。

「荷物、まだ空だろ」

心臓が止まるかと思った。空の段ボール、見られていた。

「……明日の朝やります」

「嘘をつくな。——最後くらい」

低い声だった。怒りじゃない。もっとずっと切実な何か。振り向いた蓮一さんがソファに近づいてくる。私の正面に立って、見下ろした。

「修繕完了のメール、2週間前に来てただろう」

息が詰まった。

「管理会社には俺からも確認した。部屋はとっくに住める。——なんで帰らなかった」

バレている。全部。膝の上で拳を握った。笑わなきゃ。いつもの

笑顔を貼らなきゃ。大丈夫ですって言わなきゃ。

——笑えなかった。

「……ごめんなさい。すぐ出ま——」

立ち上がろうとした肩を、大きな手が押し戻した。ソファに沈む。蓮一さんが両側に手をつく。腕の檻。顔が近い。暗い瞳の中に、涙を堪えた自分の顔が映っている。

「逃げるな。——お前はいつもそうだ。本音を出す前に逃げる」

「逃げてない……」

「逃げてる。3ヶ月間ずっと見てた」

——ずっと。

「お前が俺のコーヒーの温度を体調で変えてたこと、気づいてないと思ったか」

血の気が引いた。

「俺の設計図を覗き込む時だけ敬語が外れること。知ってる。俺が好きな献立の夜だけ、少し笑うこと。知ってる」

唇が震える。やめて。もうやめて。

「風邪の夜にうなされて、俺の名前を呼んだこと。——2ヶ月前から知ってる」

涙が落ちた。

「やだ……寝言なんて……聞いてない……」

「聞かせるつもりもなかった。お前が自分で言うのを待ってた。——だがもう期限だ」

大きな手が頬を包む。親指が涙を拭う。手のひらが熱い。いつもそう。この人の手だけが、いつも熱い。毛布をかけてくれた手。素麺を茹でてくれた手。サンダルの棚を直してくれた手。

「お前の本音をよこせ。ビジネスライクな感謝はもう聞きたくない」

何かが、砕けた。

四年間。元彼に「大丈夫な顔してるよな」と言われてから積み上げた「求めない自分」が、この人の手のひらの中で崩れていく。

「……離れたくない」

声が壊れている。自分の声じゃないみたいだ。

「ここにいたい。蓮一さんのそばがいい。毎朝コーヒーを淹れたい。あなたの好きな味噌汁を作りたい。あなたの寝癖を見ていたい。——ずっと言えなかった。言ったら嫌われると思って」

蓮一さんの瞳が揺れた。灼けつくような何かが、黒い目の奥で燃えている。

「嫌うわけないだろ。——お前が来た日から、この部屋はお前の匂いがしてる。それを消したくなかった」

唇が塞がれた。

——そして今、ソファの上で、この人の腕の中にいる。

キスが深い。唇を割って舌が入ってくる。蓮一さんの舌の温度を初めて知った。コーヒーの苦みがかすかに残っていて、その味だけ

で腰の奥が疼く。後頭部を抱え込まれて、指がボブの髪に沈んで、もう逃げ場なんてどこにもない。

——逃げたくない。

キスが外れる。唇の間に透明な糸が引いて、切れた。蓮一さんの目がまっすぐ私を射抜いている。

「……止めるなら今だ。これ以上触ったら、契約終了じゃ済まなくなる」

合理的。この人らしい最後の猶予。

首を横に振った。

「……止めないで」

蓮一さんの黒い瞳の奥で何かが外れた。獣みたいだと思った瞬間、下腹がきゅっと引き攣る。

カットソーの裾に手がかかる。ゆっくりと持ち上げられて、腹部が、肋骨の浮きが、ブラの下端が、順番に晒されていく。夜の空気が素肌を撫でて、鳥肌が立った。

「腕、上げろ」

低い声に従う。カットソーが抜けた。ブラだけの上半身を、蓮一さんの視線が首から胸元へなぞるように降りてくる。見られている。この人に。その視線の熱さだけで身体の芯が疼いて、反射的に腕で胸を隠した。

「……見ないで。あんまり、ないから……」

薄い胸がずっとコンプレックスだった。色気がない。女として足りない。ずっとそう思ってきた。

蓮一さんが手首を掴む。腕を外す。抗えない力じゃないのに、抗えない。

「見る。——お前が3ヶ月間隠してたもの、全部見る」

背中に手が回る。ホックが外れる。ためらいのない、けれど乱暴じゃない指先。ブラが落ちた。薄い胸が露わになる。

蓮一さんの息が止まった。

「……お前、自分の身体を分かってない。この鎖骨のラインだけで、俺がどれだけ——」

言いかけて、止まった。代わりに唇で示された。鎖骨のくぼみに唇が落ちて、舌先がゆっくりなぞる。骨の浮きに沿って、丁寧に、丁寧に。まるで設計図のラインを確かめるみたいに。

「ん……っ」

喉から甘い声が漏れた。唇がゆっくり下りていく。胸の膨らみの上を通して、でも乳首には触れない。すぐ横を、ぎりぎりのところを、唇だけがかすめていく。乳首がつんと硬くなっていくのが自分でも分かる。空気に触れているだけなのに、痛いくらい尖っていく。

「……っ、蓮一さん……」

「ここ、もうこんなになってる。触ってほしいのか」

「言わせないで……っ」

「言わなきゃ触らない」

吐息だけが乳首にかかる。あと数ミリ。あと数ミリで唇が届くの

に、届かない。焦れったくて腰が浮く。

——求めたら捨てられる。ずっとそう思ってきた。欲しいと言ったら重いと言われる。そう信じて黙ってきた。

でも。

「……触って。お願い……」

言えた。

蓮一さんの唇が乳首を含んだ。舌先がゆっくり周囲を巡って、先端を舐め上げて、きゅっと吸い上げる。

「んっ……あ、あ……っ」

脳の奥で火花が散った。もう片方の乳首を指先が挟む。親指と人差し指の腹で転がされて、軽く弾かれる。口と指のリズムが違う。左は舌先で、右は指の腹で、同時に二つの違う快感が胸に走って、思考がぐらつく。

「はっ……や、やだ……声出ちゃう……」

「出せ。隣の部屋まで壁が厚い設計にしてある」

「そういう問題じゃ……んんっ……」

建築士の台詞だと笑いかけた唇を、蓮一さんの舌が塞いだ。乳首の先端をちろちろと嬲り始めた途端、思考なんて全部溶けた。歯で軽く挟まれて、そのまま舌先でなぞられて、指では味わえない種類の快感が胸から下腹へ直通で降りていく。

手が腰に滑った。ショートパンツのボタンが外れる。ジッパーの音。腰を浮かせられて、ショートパンツと下着がまとめて引き下ろされた。太腿の内側に夜気が触れた瞬間、脚が反射的に閉じる。

蓮一さんが閉じた膝に手を置いた。力が入っていない。ただ、置いているだけ。

「開けろ。——お前を見たい」

「やだ……恥ずかしい……」

「恥ずかしくていい。恥ずかしい顔ごと見せろ」

ゆっくりと、膝を開いた。蓮一さんの視線が太腿の内側を伝って、いちばん隠していた場所に届く。

「……こんなに濡れてる」

指先が内腿の付け根をなぞった。蜜が糸を引いている。触れられてもいないのに、こんなに。恥ずかしい。恥ずかしいのに、この人の目に曝されていることが堪らなく甘い。

「やだ……っ、見ないで……」

「見る。全部見る。——お前が隠してたもの、一つ残らず」

指が触れた。裂け目を上から下へ、ゆっくりなぞられる。濡れた音が指先に絡みつく。

「ひっ……」

小さく跳ねた身体を、蓮一さんの左手が腰を押さえて逃がさない。右手の指先が核に触れた瞬間、太腿が勝手に痙攣した。

「ここだな。——触った瞬間、脚が震えた」

「あっ……そこ……っ」

「建築士はな、構造の急所を見つけるのが仕事だ。——お前の身体
の設計図、3ヶ月かけて頭の中で引いてた」

低い声でそんなことを囁きながら、指先が正確にそこを捉える。
くるくると、一定のリズムで、焦らすように。でも外さない。快感
がじわじわと腰の奥から湧き上がって、指先の一周ごとに濃くなっ
ていく。

「ん……あ、あ……っ、蓮一さ……っ」

「ここ……自分で触ったりしてたか？」

「……してない」

「2年もか」

「……誰にも、求められてないと思ってたから」

蓮一さんの指がほんの一瞬止まった。私を見つめる瞳の奥に、怒
りに似た光が走る。私のことを「求められていない」と思い込んで
いたその二年間ごと焼き尽くすような目。

「——お前のその思い込みを、今から壊す」

指がゆっくりと中に入ってきた。一本。きつく目を閉じる。中の
壁が蓮一さんの指を締めつけている。長くて、骨張っていて、製図
用のペンダコがある指。設計図を引く指。毛布をかけてくれた指。
——その指が、今、私の中にいる。

「……力、抜け。俺に委ねろ」

低い振動が耳の横で響く。身体の芯に声が届いて、内壁が少しず
つほどけていく。指が奥へ滑り込んだ。

「……いい子だ」